

## 折に触れ 四字熟語

### NO. 123 『一葉知秋』 いちよう ちしゅう

< 意味 > わずかな前兆や現象から、事の大勢や本質、また、物事の衰亡を察知すること。一枚の葉が落ちたのを見て、秋が来たことに気づく意から。

一般に「一葉秋を知る」と訓読を用いる。

< 出典 > 『淮南子』「説山訓 十五」

「嘗一臠肉、知一鑊之味、懸羽與炭、而知燥溼之氣。以小明大。見一葉落、而知歳之將暮、睹瓶中之冰、而知天下之寒。以近論遠。」

読み下し：一臠いちれんの肉なを嘗なめて、一鑊いっくわくの味あじを知り、羽うと炭たんを懸かけて、燥溼そうしふの氣きを知る。小せうを以もつて大あきらを明あきらかにするなり。一葉いちようの落おちつるを見て、歳としの將まさに暮まれなんとするを知り、瓶へい中ちゆうの冰こほりを睹みて、天下てんかの寒さきを知る。近ちかきを以もつて遠とほきを論ろんずるなり。

通 釈：『一切れの肉をつまんで、なべ全体の味を知り、羽毛と炭を衡にかけて大気の乾湿を計測する。(これは) 小さなことによって大きなことを明らかにするものである。一枚の葉が落ちるのを見て、歳が暮れようとしていることを知り、瓶中の水が凍っているのを見て、天下の寒さを知る。(これは) 身近なことによって遠くのことを論ずるものである。』

語 釈：「一葉」は一枚の葉、一枚の葉が落ちること。「知秋」は秋の来たのに気づく意。

一 言：出典の淮南子は、紀元前120年ごろ漢代初期に編まれた百科全書で神話伝説研究資料の宝庫と言われています。出典は一葉落ちて歳の暮れを知るとなっています。出典を借りて四字熟語が作られていくこともあることが分かります。

参照文献：新釈漢文大系「淮南子」下 岩波書店「四字熟語辞典」